唐丹文芸

唐丹短歌会

「さちぐさ」詠草

逝きし子の十三回忌法要す御師の経に力湧き来ぬ
世は移り人も変れど咲く花は幾世経ぬとも地上潤す　環　あき

新緑の山から山を白煙のおおいゆくがに朝霧の這う
新緑の山の心に真向いて今日一日の幸を希いし　川原　せい

明日の年実のなるはずの初キウイ朝風に揺る青実愛しく
文月の深緑映える向い山梅雨晴れ清やながめゐる朝　中嶋　多喜子

花みずき迎ぎみる根元坐して聞く寂聴の法話千の風と散る
沙羅双樹あの世とこの世を渡る風さやさやと音花びら乗せて　須具　美佐子

おしはかりみれど見えざり修道女の自給自足と祈りの世界
折をりに一抹の郷愁もたさるやトラピスチヌの静けき残照　上野　ウタ子

杉材を山積したるトラックが山峡の道静かに下る
過ぎし日の生改の友と病院で盡きぬ会話に再会を誓う　大津　秀子

梅雨にぬれ巡りて奥の正法寺師の袈裟の香に慕弥の扇に
滔滔と歴史重ねて茅葺きの法堂に満つ修証義の声　磯崎　彬

また来ると言へば病ひの重い叔母「まっているよ」と嬉しげに言う
われの手を握る力もなくなりし今際の叔母の手は温かし　高橋　昌子

無情の風

川原　セイ

いつも明るく
温く人々をつつみこむ
希望の灯を
ともしつづけてきたYちゃん
信頼し　行動的で
笑顔の美しい人

夏の太陽が燦燦と照る日
無情の風が　吹き荒れ
命をもぎとられ
サヨーナラの日がきた

かなしみは限りなく
涙が雨のように流れる
在りし日の
あの笑顔で
千の風になって
私たちをはげまし
青空のどこかで手をふって
見守ってくれているでしょう

数々の温情に
感謝しながら
御仏の許で
安らかにと祈る

合掌